

## 「世界」と「靈性」

——世界形成と平和の問題をめぐる——

水野友晴

鈴木大拙は、太平洋戦争終戦直後の一九四五（昭和二十）年八月十六日に、書簡に次のように記している。

「愈々終結<sup>①</sup>となったが、科学の力が足りなかつたと云ふことのみきく、情ない事だ、實際は宗教が足りないのだ、日本の靈性的自覚の不足が今日を生んだのだ、『国体』を此靈性の次元まで向上させないと、日本は更生せぬ、科学はこの靈性によりて支配せられない限り、米国の遣り口のやうなもののみが考へ出される、人間の福祉とか平和とか云ふものは遂に出ない、日本人はこれから此点につき、更に新たな思想態度をとらなければならぬ<sup>①</sup>」。

このように、日本を敗戦という苦境に陥らせたのは、日本の靈性的自覚の不足であったと大拙は捉える。同様に大拙は、日本の再出発もまた、日本の靈性に基づくものでなければならぬ<sup>②</sup>と考えていた。当然のことながら、日本の靈性に基づいて新

生日本を建設するという大拙の願いは、日本が（そして世界が）戦争自体を脱却することをその目的に含んでいた。そこで、豊かな靈性的自覚からは世界平和が招来されると大拙は見ていたと捉える必要がある<sup>③</sup>。

大拙の生涯の親友、西田幾多郎は太平洋戦争が終結する直前に急逝したが、戦後日本の再出発は武力によるのではなく「精神的自信」によるものでなければならぬと考えていた<sup>④</sup>。日本の再出発についての両者の発言には通じ合う点が多く見られるが、実際に彼らは意見を交換し合い、共同して日本と世界の将来の建設を構想していた<sup>⑤</sup>。「場所的論理と宗教的世界観」（西田、一九四五（昭和二十）年）、『日本の靈性』（大拙、一九四四（昭和十九）年）、『靈性的日本の建設』（大拙、一九四六（昭和二一年））といった作品は、日本が灰燼に帰しつつあるという状況において、なお日本から失われてはならないものについて彼らが

探求したことから生み出されてきた労作である。そこで、豊かな靈性的自覚からは世界平和が招来されるとの大拙の主張についても、彼らの思想的交流を視野に入れつつこれを考察することで、われわれは有意義な知見をそこから得ることを期待することができる。

拙著「世界的自覚」と「東洋」——西田幾多郎と鈴木大拙<sup>(6)</sup>では、「科学と旧来の形而上学との間の乖離が架橋し難いものであることが明白となった現今の情勢において、この乖離によって深淵の上に位置することとなった内生の充実や人生問題の根本解決といった問題について、いかにしてこれを救済するか<sup>(7)</sup>」という現代哲学の課題を彼らが共有していたことを究明した。この課題に対して彼らは「世界大に活動する創造的能動性<sup>(8)</sup>」という考えでもって応じ、世界はこの「世界大に活動する創造的能動性」の集成としてあること、また、われわれもまた自己の働きを通じてこの創造的能動性を発揮し、この世界大の創造動性に紐帯をつなげてゆくことになることを主張した。大拙による「日本的靈性」の提示もこうした主張の枠内にあるものに他ならない。してみると、豊かな靈性的自覚から世界平和が招来されるという彼の主張も、「世界大に活動する創造的能動性」にわれわれが紐帯をつなげてゆくことと、世界平和の招来とが、どのような必然的連関性をもって結ばれてくるのかという観点から考察を加えることが可能だろう。このような動機から本論文では、世界平和の招来と大拙の主張する「靈性」と

の関連性について、考察の時期を西田の最晩年前後に設定しつつ探ってみることにしたい。

### 一 「我も人も」という地平から発せられる、 靈性のおののき

靈性ということばのもとで大拙がどのようなことを考えていたのかについて探るため、次の文章に注目したい。「精神と物質との奥に、今一つ何かを見なければならぬのである。二つのものが対峙する限り、矛盾・闘争・相剋・相殺などいうことは免れない。それでは人間はどうしても生きて行くわけにいかない。なにか二つのものを包んで、二つのものが畢竟するに二つでなくて一つであり、また一つであってそのまま二つであるということを見るものがなくてはならぬ。これが靈性である<sup>(9)</sup>」。普段われわれは、主観と客観、作用と対象、自と他といった具合に、二元的な地平の上でものごとを把握しているが、大拙はここで、これを「一の二」として、二元的にも見るべきことを主張する。

そうするとこの場合、自と他の二は「一の二」としても捉えられ、二の背面に自他をともに包む「一」が見出されてこなければならぬ。この点に関連して大拙は、「本当の愛は個人的なるものの奥に、我も人もというところがなくてはいけない。ここに宗教がある。靈性の生活がある<sup>(10)</sup>」と語る。

このように見れば、大拙の言う日本の靈性的自覚とは、利己

的な利害得失の意味合いを脱した「我も人も」という地平に発する働きが、日本人の精神性の奥底から発現してこくることの感得を指している。この働きは、日本の精神性を内へと閉じ籠もらせる方向ではなく、むしろそれが有する特殊性を駆つて、様々な国や文化の人々が共に過ごす公共性の場へと開いてゆくよう導く。靈性への注目はこのようにして世界性への関心に結びつく。

## 二 東洋文化をして「歴史の世界」の形成に資するものに昇華するという課題性

日本的靈性的自覚の特性を、「我も人も」という次元に発する働きが日本人の精神性の奥底から発現してこくることの感得と捉えた。この働きは、日本人の精神性に発現してこくるという意味で個性・特殊性を前提とし、次にはその特殊性を「我も人も」を志向するための特長となす。われわれが前進即遡源的に靈性と通交し、靈性がわれわれをこの開かれた地平へと向かわしめてゆくことは、「我も人も」の具体的な様相が、日本的なるものの特長を手段として、具体的に現出されてこくるということでもある。

このことはまた、日本人の精神性が、「我も人も」という平等性を漲らせつつ特殊性を發揮して公共的な地平に向かつてゆくことを通じて、他の特殊性との共存を実現し、そのようにして同時存在することによって実現を見る協働の働きの一員とし

て新たに世界を紡いでゆくことを意味する。このような思想的姿勢は西田においても同様に見出せる。

講演「現実の世界の論理的構造」（一九三五（昭和十）年）で西田は、東洋文化は未発達な文化で、これが発達した際には西洋文化のようにになるといった文明史観に異を唱え、「東洋文化と西洋文化とは夫々独立の立場に発達したものである。西洋文化だけでは必ず行詰り、それは東洋文化を入れることに依つて発達する。又東洋文化は西洋文化を入れることに依つて発達する。〔中略〕さういふやうにすることが文化の発達することである」と主張した。

西田によるこの主張は、彼の、「東洋文化は主観を中心とし、西洋文化は客観を中心にしたものである。〔中略〕此の両方のものが結び付いたところに大きな世界文化が考へられる」との考えに基づいている。この考えはさらに、「最も具体的」な、「本当の我々の世界」である「歴史の世界」は、「物が互に働く世界」であり、それは「互に独立なものでありながらしかも結び付く」<sup>(18)</sup>という構造からなるとの考えを基礎としている。

「互に独立なものでありながらしかも結び付く」ことは、西田によって「個物は個物に対する個物」とも言い表される。西田にとって個物とは「自分から働」き、「自分で自分をどこまでも決定してゆく」<sup>(21)</sup>ものであり、そのことによって個物はその独立性を確保する一方で、それだけでは個物は「本当の我々の世界」に位置するものたり得ない。そこには個物が他と「同時

存在<sup>28)</sup>」することが必要であり、自分で自分を決定しゆく個物がそれぞれに働き出しつつ、しかし独立する他者同士として相互作用を及ぼし合い、同時存在的にあるとき、「本当の我々の世界」である「歴史の世界」が開かれると西田は見る。そこにあつては、みずから主体的に形成するという主観的時間的側面と、そうした形成点が同時存在して空間的な広がりを見せてゆくという客観的側面とが両立している。

「歴史の世界」についての西田のこうした考えを見れば、彼の言う「東洋文化」と「西洋文化」もまた、それぞれ独立的に自分から働き出しつつ、併せて互いに同時存在して、両者相まって「歴史の世界」が開かれることになる。その意味で東洋文化は西洋文化に対して、同様に西洋文化は東洋文化に対して、他者として共存している。

このように見れば、「東洋文化は主観を中心とし、西洋文化は客観を中心にしたものである」との西田の主張を、われわれは、単純比較と優劣の観点から理解するべきではないということになるだろう。西田の関心は、東洋文化と西洋文化が互いに独立しながらしかも結び付くという関係性、そしてこの関係性において両者がどのような結びつきを果たして現実の、また将来の「歴史の世界」が開かれるべきかという点に置かれていたからである。そこで西田のこの主張は、「歴史の世界」は主観的であると共に客観的、客観的であると共に主観的であるが、この世界形成の構造について、その主観的方面に光を当てよう

とした場合、東洋文化の思想的伝統がそれに貢献するものを多く持つており、一方、その客観的方面に光を当てようとした場合、西洋文化の思想的伝統がそれに貢献するものを多く持つているという意味から解されるべきである。

併せて注意する必要があるのは、東洋文化も西洋文化も、それが現実の「歴史の世界」に位置するためには、みずからに対してなお一層の昇華が検討される必要があるということである。東洋文化と西洋文化は、それらが流通する地域的領域をそれぞれ伝統的に領してきた。ただしそれらの領域は、それだけでは閉じられた小世界にとどまり、現状にあつては東洋と西洋とを内包する「本当の我々の世界」たる「歴史の世界」からはむしろ隔たったものとして存している。したがって「本当の我々の世界」に対応する「大きな世界文化」にこれらが位置を占めるためには、これらの文化が内包する原理的知について今一度吟味し、それを「歴史の世界」の形成にも併せて通用するものへと昇華させてゆく必要がある。

このことに留意すれば、「東洋文化は主観を中心とし、西洋文化は客観を中心にしたものである」との西田の主張は、東洋文化は主観性の方面への着目に長じたところにその特長があるという指摘にとどまらず、東洋文化は「歴史の世界」の将来をも形成する大なる形成作用に、その特長を駆って日本の、また世界の人心をいかにして通じさせてゆくかという課題を含んで、西田によって投げかけられたものとしてこれを見ること

できる。

### 三 「無分別の分別」としての無心の働き

以上のように見れば、大拙や西田が見る「日本からの世界貢献」については、「本当の我々の世界」たる「歴史の世界」を形成する大なる形成作用にわれわれがいかにして通じてゆくことができるか、また、それについて日本文化の伝統がどのような知を提供してくれるものであるかといった文脈から検討されていることがわかる。この点に関連して、興味深い書簡を西田が大拙に送っている。

「私は即非の般若的立場から人といふもの、即ち人格を出したいとおもふのです。そしてそれを現実の歴史的世界と結合したいと思ふのです。「中略」君の「日本の靈性」は実に教〔へ〕られます。(無念即全心は面白<sup>24</sup>)」。

西田がここで「面白い」と評する「無念即全心」は、大拙の『日本の靈性』に次のように登場する。

「盤山宝積という禪者が居たが、その人はこの無功徳を端的に次のように述べて居る。ちょうど刀を空中で振り回すようなものだ。空中で振り回す刀であるから、向こうへ届くとか届かないとかいう問題はさらにないのである。それからその振り回した刀のえがく円であるが、それは空輪でなんらの跡がない。そうしてまた刀の刃の欠けるといふこともない。こういう具合に心が動くとき、それを無心とも

無念ともいってよい。そしてこの無念がすなわち全心である。全心がすなわち仏だ、全仏だ。全仏はすなわち人である、人と仏とは一体である<sup>25</sup>」。

『日本の靈性』のこの箇所も、己の振る舞いと大なる形成作用との関係について扱ったものだとと言える。鍵をなすのは「一体」ということである。無心(無念)の働きは、人間をその作用当体としているという意味で、有限なる人間の通常の行為と同様の制約性のもとで働く。ただしこの働きは、その由来を「個人的なるものの奥」たる靈性の次元に有している。すなわち無心の働きは、その性格を「我も人も」というところに置く無差別平等の働きが、有限なる人間をその作用当体として働き出たものである。その意味で無心の働きは、内に無差別性を漲らせた有限なる行為であり、また、無差別性を有限なる行為を通じて具体的に現出せんとする行為である。そこにおける「一体」は、無差別と差別(有限)との一体として見る事ができる。

同じ箇所で大拙は、無心の働きを「無分別の分別<sup>26</sup>」としても語る。「無分別の分別」は、分別が無分別中に消失することを言うわけではない。そうではなく、「分別のないのではない、無分別から出る分別<sup>27</sup>」と説かれるように、「無分別の分別」にあっても分別心はやはり分別心であるが、ただその分別する働きが、無分別、換言すれば「我も人も」という無差別の次元にその由来を持つていることが把握されることで、分別心は、何

のために分別するかというその働きの目的について捉え直す機会を得る。これまでは分別することをその目的としてきた分別心は、この把握を通じて、無分別を働き出すために自身の分別の働きを使用することへとその目的を置き換えてゆく。

こうした捉え直しの機会の発生は、分別心のそれまでの働きに対して、それをそのままでは是認しない否定性に分別心が直面するという事態としても、これを見ることが出来る。働きの向かう先を己の利益に限ってきた分別心は、この否定性に逢着することでその目的を破壊され、面目を失う。しかしこのことを通じて分別心は、「は、から、い、の、ない、なんら計画を樹てない、目的をしておかない、報いを求めぬ、自分を主にした因果を考えない」こと、すなわち、その本来の働きのままに働き出すことに新たな面目を見出す。

このことはさらに、従来は己の利益を実現する目的から分別心に使役されてきた諸作用が、ただそれら諸作用が有する特長のままに働き出すよう解放されることとしても見る事ができる。この見方から振り返れば、「無分別の分別」は、己の利益のみに向かうという重しが分別心から取り除かれ、分別心の働きを構成する諸作用がそれぞれ自由に働くことを得る事態として、これを解することが出来る。

無心の働き、「無分別の分別」についてのこうした考察は、自国の利益の追求に狂奔し、自国民の自由な働きを抑圧してきた従来に対してでも応用できる内容を有している。この抑

圧は、日本の敗戦という事態によって今や自滅しようとしている。「無分別の分別」において諸作用がそれぞれ自由に働き出すことを実現してゆくように、日本において国民各人がその本来の特長のままに自由に活躍し得る機会が到来しつつあると西田と大拙は見えていたのではないだろうか。無心の働き、無分別の分別をめぐる彼らの考察は、かくして世界形成の問題、就中、靈性の發揮を通じて世界平和を招来するという主張に結びついてゆくこととなる。

#### 四 「大悲」の行いと世界形成

「戦争礼讃」Jans Bell(魔王の宣言)と題されて『靈性的日本の建設』に収録された小文で、大拙は人間に破壊と殺戮をもたらす「魔王」を登場させ、「魔王」に、「魔王は力そのものだ」、人間には「魔性」があり「人間の皮を剥ぐと、皆わしらの仲間」だと語らせ、次のように宣べさせる。

「御互に知りもせず、従つて憎しみも親しみもないもの同士が、敵だ味方だと云ふと、あらゆる武器——凶器を持ち出し、発明し合つて、殺し合ふ。「中略」さうして「敵」に克つた。何百人何千人何万人を殺戮し殲滅した味方は大勝利だと云つて、快哉を連呼して已まぬ「中略」わしはこれから第三次、第四次と、次第を追うて強度な虐殺機械を発明させて、人類滅亡の時期を益々早めさせてやる」。

大拙が語る「魔王」は、「敵と味方」を区別することに人間

の視野を狭めさせ、「敵」を殲滅するよう唆すこと<sup>(34)</sup>で、その力を發揮する。「魔王」は「敵と味方」を区別する分別心に巢食っている。しかしながら、分別心が無心の働きへと昇華する<sup>(35)</sup>ことで「魔王」は窮地に陥る。「魔王」は次のように告白する。

「原子爆弾で焼き尽くした焦土の中から青々と芽を出す草があり木がある〔中略〕。大地の懐から太陽の光を仰いで出て来る不思議な力、此力はわしの力よりも強いのだ。これは魔性のものでない。力以上の力だ。不思議にわしの力を無力にしてしまふのだ。人間の奴はこれを靈性的だとか云つて居る」<sup>(36)</sup>。

大地から草木を芽吹かせる力は、麦は育てるが蕎麦は育てないといった選り好みを行う性質にはない。それは万物に一樣に注がれる力であり、一切を坦々と化育する。否定の契機を経て、分別心はこの一樣の化育の働きに帰入する。その様子については「同情」を例に大拙によって次のように語られる。

「自と他とは始めから区別せられないで、われらには各自に何か本具底なものがあつて、それが自他を超越して動くのだと考へたい。この動きが始めから各自にあるので、いわゆる「他」人の苦しみを、自分の苦しみに引きかえて見ることが出来るのである」<sup>(37)</sup>。

困難や苦を目にしてわれわれがそれを放つておけないとの心情を抱くのを、大拙は「我そのまゝの本然」<sup>(38)</sup>の働きとして捉える。「維摩經」の維摩居士が「一切衆生病、是、故、我病」<sup>(39)</sup>と

語るように、このおのずからなる心の働きは、その性質のままに、自他を区別することなく、「すべての悩みを背負つて立つ」<sup>(40)</sup>。無心のこのような側面を大拙は、『日本の靈性』や『靈性的日本の建設』において、「大悲」<sup>(41)</sup>として語る。

この「大悲」からの行いこそ、大拙がこれからの日本が立脚すべきものとして見ていたものであつた。それはたとえ彼の次のような発言から窺うことができる。

「上から抑へられるのではなく、又他律的に引きのばされるでもなく、本来具有底の靈性的悲願の力を唯一の怙として、無遠慮に、しかし自他の人格的尊嚴を傷つけることなしに、我等と衆生と共に、靈性的生活を経営し行くこと——これがこれからの日本に与へられた課題であり使命でなくてはならぬ」<sup>(42)</sup>。

日本が「日本的靈性的自覚」や「大悲」の行いに目覚めて立ち上ることについて、大拙はそれによつてどのような意義を見ていたのか。「大悲」は自他の区別に拘泥しない。無心の働きを發揮できるのは勝者だけだと言つたこともない。「大悲」を行ずる働き手たる時、彼のもとにあるのはただ無心に苦に向かうことだけである。このようにしてまずは敗者であることに区切りをつけて日本が一步を踏み出すことを大拙は思い描いたのではないだろうか。

しかしそれは日本が過去を放擲し、忘却することではない。過去は、西田が「本當の我々の世界」<sup>(43)</sup>として語る「歴史の世界」

において、「他者」として常に伴われる。「大悲」は自他の区別に拘泥せず無心に苦の救済に向かうから、かつての日本の苦についてでもそれを放置することはない。日本発の「大悲」はそうした苦をも掬い取り、また、みずからもやはり苦を背負う者に他ならないことを自覚しつつ、将来世界の建設へと進む。

日本発の「大悲」の行いはまた、「歴史の世界」に存するあらゆる「他者」に巢食う苦のもとにも向かう。そうした対処の姿は、世界の人々の日本についての評価を徐々に改めてゆくことだろう。

さらに、自他の区別に拘泥しない「大悲」の行いが日本から発せられること自体が、「歴史の世界」における一つの歴史的事件である。現代世界において、自と他とを区別し、自にのみ利益をつけ、その反面、周囲に苦をばらまくことも厭わない風潮が色濃くなってきたという現状があるのであれば、日本発の「大悲」の行いには、これに否定の一撃を与え、現代世界における諸々の分別を「無分別の分別」に昇華してゆききつかけを期待することができる。そのようにして無心の働きが、日本にとどまらず、世界各地から働き出してくることからは、世界全体をしてそこに存する苦を放置せしめず、苦に向き合いつつ世界を形成することが進んでゆくことを期待することができる。そのためには、日本人は自身の内に確かに「大悲」の精神が宿り脈打っていることをわきまえる必要がある。

西田が東洋文化の特長を主観への注目に見、大拙が日本の再

出發を日本的靈性に基づくものでなければならぬと考へた理由、そして、「本来具有底の靈性的悲願の力を唯一の怙とし持として、無遠慮に、しかし自他の人格的尊嚴を傷つけることなしに、我等と衆生と共に、靈性的生活を經營し行くこと」(大拙)、「何処までも道義的に文化的に我國体の歴史的世界性、世界的世界形成性の立場だけの自信を失はず、固く此立場を把握して将来の民族發展の自信を持たず様にせねばならぬ」(西田)と説いたことの背景には、このような構想と願いがあつたように思われる。

(1) 一九四五年八月十六日、加納実宛書簡。「書簡九二三」『鈴木大拙全集』第三七卷、岩波書店、二〇〇二年、一二五頁。ふりがなは大拙による。

(2) 鈴木大拙「靈性的日本の建設」『鈴木大拙全集』第九卷、岩波書店、一九六八年、四一五頁。

(3) 鈴木大拙「平和の確立のために吾等は何をなすべきか」『鈴木大拙全集』第三三卷、岩波書店、二〇〇二年、一九八頁。

(4) 一九四五年三月十一日、高山岩男宛書簡。「書簡四三三三」『西田幾多郎全集』第三三卷、岩波書店、二〇〇七年、三四六—七頁。

(5) その様子は、たとえば大拙が「西田の思ひ出」という小作品の中で次のように語っている。「戦後の世界の大勢——特に思想方面——につきては能く話し合つた。東亜における戦争の見透しについては、兩人共大体一致して居た。問題はそれから後の事で、吾等日本人としてはどう云ふ方向に進むべきかと云ふにあつた。「揺がぬ嚴根は武威でなくて、それを越えたものでなくてはならぬ」、「この越えたものを本当に攫むことによりて、日本国の前途は実に洋洋たるものがある。世界文化に貢献すべきものはこれから出るべきである」と云



ふのが、吾等の意見であった」（鈴木大拙「西田の思ひ出」『鈴木大拙全集』第三三卷、岩波書店、二〇〇二年、二六頁）。

(6) 水野友晴「世界的自覚」と「東洋」——西田幾多郎と鈴木大拙  
こぶし書房、二〇一九年、四五四頁。

(7) 同、三〇頁。

(8) 同、一七頁。

(9) 同、一八二頁以下。

(10) 鈴木大拙「日本の靈性」角川ソフィア文庫、二〇一〇年、三〇頁。

(11) 同、六二頁。傍点は水野による。

(12) 西田幾多郎「現実の世界の論理的構造」『哲学の基礎問題』『西田幾多郎全集』第一二卷、岩波書店、二〇〇四年、三三七—八頁。

(13) 同、三三七頁。

(14) 同、三二四頁。

(15) 同、三二五頁。

(16) 同、三二四頁。「歴史の世界」という用語のほうが西田哲学において一般的と思われるが、本資料にしたがって「歴史の世界」という用語を使用することにする。

(17) 同、二一七頁。

(18) 同、三〇五頁。

(19) 同、三二三頁。

(20) 同、三〇三頁。

(21) 同。

(22) 同、三一頁。

(23) このような、独立する他者同士が結びつくことで世界形成が進行することについての考察については、水野、前掲『世界的自覚』と「東洋」——西田幾多郎と鈴木大拙「二九八頁以下で、「対話」の意義を例に論じた。

(24) 一九四五年三月十一日、鈴木大拙宛書簡。「書簡四三八六」『西田幾多郎全集』第三三卷、岩波書店、二〇〇七年、三四八—九頁。

(25) 鈴木大拙、前掲『日本の靈性』三五五頁。

(26) 同、三五八頁。傍点は水野による。

(27) 同。

(28) 同。

(29) 鈴木大拙、前掲『靈性的日本の建設』一八頁。

(30) 同、二〇頁。

(31) 同、一九頁。

(32) 同、一九—二〇頁。

(33) 同、二六頁。

(34) 鈴木大拙「日本の靈性」四二九—三〇頁。

(35) 鈴木大拙、前掲『靈性的日本の建設』一八頁。傍点は大拙による。

(36) 同、五〇頁。

(37) 同。

(38) 鈴木大拙、前掲『日本の靈性』四三〇頁。

(39) 鈴木大拙、前掲『靈性的日本の建設』四頁。

(40) 同。

(41) 同、四—五頁。

(42) 一九四五年三月十一日、高山岩男宛書簡。「書簡四三八三」『西田幾多郎全集』第三三卷、岩波書店、二〇〇七年、三四六—七頁。

(みずの・ともはる、哲学・宗教学・日本思想、日独文化研究所事務局長)